

シドニー散歩物語

途方に暮れる三人の夜

——園田恵子



シドニーに着いてからというもの、オヘアハウスもサーキョラーキーも見えていない。いわゆる観光名所というものは無関係に目をすくし、私が見たのはゲイとレスビアンばかりという風になってしまった。

それというのも異常に興味に走った宅八郎そっくりで某女性誌、私の担当編集者であるロバ氏が、異常に興味に走ったシドニー在住の女性ジャーナリストに私のコーディネート依頼したためであった。

「もう、すごいディープなシドニーの夜をすごせますよ、ファッションコードはラバー、ブラステイクですよ」と宅八郎そっくりの編集者息を荒くして。彼は会社の机のひき出しにいっぱいに女性用のボンテージ風下着をコレクションしているのだ。

さて、週末に合わせてシドニーに着いた私のキングス・クロスのホテルに、彼女は迎えにきてくれた。部屋のドアを開けると、あっと叫ぶような激しいドレスコードのままで、SMの女王を百倍恐くしたような美貌の女性が立っていた。ヒョウ柄のコート。きつめのメイキャップ。

長い腰までの黒髪に大きな赤い造花が帽子のように頭上にのせられ、足もととは編みタイツ。

「はじめまして」

とかすれたようなハスキーな低音であいさつする。コートを脱いだ下にはマドンナの衣裳のようなものにガーターヘルト姿。この彼女が夜な夜な私をいかがわしげな店やクラブに案内してくれるのである。ハードロックカフェで軽い食事をすませるとオックスフォードストリートへまっしぐらの日々。

ある日、その彼女から年一度くらいの大きなパーティーがあるって苦勞して私の分のチケットも入手したという吉報が入った。「サブカルチャー・セックス・ダンス」と銘打たれたハードなゲイとレスビアンたちの秘密のパーティーなのであるが、東京だとお飾りようになってしまおうSexの文字もここでは字義通りに行なわれるとは露しらす私はいそいそと出かけた。

パーティーはシティからそう遠くない倉庫街で行われる。それは一晩中ダンス・ミュージックを大音量で楽しむため、という風に騒音の面ばかりで私は理解していたのだけれど、それはかりではなかった。パーティー会場となる倉庫のすぐ裏の、使われていないいまでも枯れそうな真暗な倉庫の方へ、ゲイのカップルが次つぎと消えていくの気がついた。カップルや出会ったばかりの熱い二人が、すぐさまその欲望を満たせるようにと、そのスペースが必要なのだった。日本人のゲイの男友達と、レスビアンほい女友達がそちらの方へ出かけていったので後を追

うと、ちよつと、入ってみようと私の手をレスビアンほい女友達がひくので、ひかれるままに入ってしまった。真の闇でも見えないしめやかな気配。時折けだるげな男たちの吐息が、闇をゆるめかせるように聴こえてくる。かなり広い闇の中を進んでいくと突き当りに階段があった。足をのせるや耳ざわりなきしむ音をたてる階段を登っていく。登りつめるとそこには薄いつ木の板が三センチほどの間隔をおいて並んだ床の部屋があり、ハイヒールのかかとに気をつけながらさららにいくと、奥に窓のあるコンクリートの部分があった。そこへ腰を落ち着く、三人並んで座ってみるが、なんだか落ちつかない。そのうちに次つぎとゲイのカップルが手をつないで入ってくる、私たちのすぐ目の前や周囲で思っかいを荒くしはじめた。

さあ、私たちも出ようと思つと、もう次のカップルが出口をふさぎ、私は困ったことになつた、と息い始めた。気がつく、いつのまにか床が抜けるんじゃないかと思うくらいいたくさんの、三十数人の男たちで二階の空間は埋められていた。何が起こっているのかよくわからないしていると、ゲイの男友達が、「一人の美少年を二十人以上の男で苛めることにはしたくないよ、かわるがわる、順々に、ほら、後ろから少年を苛めて」とと解説してくれた。いつもは暗闇に強い私であるが、恐怖のあまりか、突然トリ目状態になっていてよくわからないう。けれど、時折外を通る車

のヘッドライトが一瞬男たちの痴態を閃光の中に浮かびあがらせるのは、ほんやりとした人影らしいシルエツトがパリの影絵芝居のように妖しげに揺れているばかりである。

そのうちに胡散臭げに私たちのことを見る視線に気づき、少なからぬ危険を感じた。見つけたらムチ打たれるくらいではすまなそうな気配に、私たちがそれらしくふるまった方がいいんじゃないかと三人でからまるようなポーズをとってはみたものの、三人だし、どのようなポーズをとればよいものかとまどろ。SMの女王風A子が声なんか出してみればそれらしくてよい、と提案し、A子とゲイの旦那がわざとらしい激しいクワイマックスの声をいきなり出した。私はしばらくきいていて、いくらなんでもそれはわざとらしくすぎるからやめた方がいい、という、A子がそうおアわざとらしい？あらどうしようというもこんなのに、といい、日常の性生活がほの見えた気まずさに沈黙していると、声に興味をもったゲイたちが、いったいあの三人はどんなすごいことをしているのかとわらわらと私たちの周りに集まってきて囲まれてしまった。鍛え抜かれた体格のマッチョなゲイばかりで震えあがるほど怖い。もしやばれてなぐられるんじゃないかと恐怖と戦いながら、ますますわけのわからぬ「体位」に変えてみたり、テナタルスみたいなからまったりもう気が狂いそう。よく見えないのか近よって真上から見下ろしているゲイが一人いるのに気がついた。私たちが

よほどエッチなことをしていると感違ひして興奮した彼はあろうことかマスターベーションを始めた。私の頭の真上でするなんて、それが耐えられない。ゲイだし、レスだし三人だしみんな見ているので何やら倒錯の世界に突入しそうでくらからしくながら、キスしているふりとか触っているふりをするうち、A子があ、今の本当に感じられたかいいだして混乱の極致。

信じられないほどエッチとがいいながら、何もしないでこんなところにいるなんて、こんなことして私たちが一番変態という気がしてきた。あやつくそこを脱出して倉庫前のたき火にあたっていると周囲が好奇の目で私たちを見ている。何だかよっぽとやらしいことをしていたと誤解している様子にこまどろ。私が通ると、「ソウ・ブラザーズ」とけだる気につぶやいたりする。どういいう意味か？(うぐぐ)

フロファイル 詩人。処女詩集「娘十八留いごと」が思婦社から出版され、各界の注目を集める。エッセイ集に「パーマネント・ラブでつかまえて」(日本経済新聞社)。

〈近況〉4月からは関西テレビの朝10時からの情報バラエティ番組「ナリノコ」となり、水曜日のコーナーに、俳優の赤井英和らとレギュラー出演。

6月に「ラ・セーヌ」10月号への執筆とクラブイベントを兼ねて二週間のオーストラリアへ。

2匹の猫か8匹出産、いずれも里猫ばかり。そのうち4匹は、既に里子に出しましたが、あと1匹が親切な里親をさがしています。ご希望の方に差し上げますので、クラブフェイスまでご連絡を京都に来た時引き渡します。